

徹底論

幼児の メディア視聴は 是か非か



●司会

棚原 洋一（東京大学小児科講師 *現在はお茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター教授）

●パネリスト

菅原 ますみ（お茶の水女子大大学院 人間文化研究科助教授）

谷村 雅子（国立成育医療センター研究所 成育社会医学研究部部長）

土谷 みち子（東横学園女子短期大学 保育学科助教授）

P R O F I L E

◆菅原ますみ (すがわら・ますみ)

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科心理学講座助教授。1987年、東京都立大学大学院人文科学研究科心理学専攻満期退学。文学博士。湘北短期大学幼児教育科講師を経て、1995年より国立精神・神経センター精神保健研究所 家族・地域研究室長、2002年4月より現職。専攻は発達心理学・発達精神病理学。著書に『個性はどう育つか』(大修館書店)、『パーソナリティ形成の心理学』(福村出版)、『社会と家族の心理学』(ミネルヴァ書房)など。

◆谷村雅子 (たにむら・まさこ)

国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長。1972年、日本女子大学卒業。医学博士。東京医科歯科大学人類遺伝学助手、米国テキサス大学遺伝学センター研究員を経て、1987年より現職。

榎原 皆さん、こんにちは。それではシンポジウムを始めます。

さて、近年、乳幼児も含めて小さい子どものメディア環境をどう考えるかということが社会的な関心事になっていきます。最近の調査でも、乳幼児が1日1~2時間、あるいはそれ以上、テレビやビデオを見ているということが明らかになっておりまし、子どもの生活の中でメディア、特にテレビやビデオに接する時間が非常に長いということがわかってきております。

ご存じのように、子どもというのは、まわりの人とのインタラクション、関係の中で社会性や言葉、価値観といったものを身につけていくわけですが、そういう時間が一方通行の情報であるメディアに接する時間が多いことによって奪われてしまっている、あるいは長時間のメディア視聴によって心の問題や社会性の問題などに悪い影響が出るんじゃないかなという社会的な懸念が広がっているかと思います。たとえば小児科関係の学会では、2歳以下の赤ちゃんにはテレビをあまり長い時間見せない方がいいんじゃないかなというような勧告が出たりしております。これは日本ではなく、アメリカの小児科学会でも出ているということで、大きな関心を呼んでいます。

そういう状況の中で、このたびの第1回の子ども学会も「メディア社会と子どもたち」というテーマを掲げているわけですが、今日のこのシンポジウムでは、子ども、特に幼児の発達にメディアがどういう影響を与えていたのかということについて実証的な調査、研究をなさっているお三方に集まっていただきました。まずは、パネラーとしてお話をいただき、その後、会場の皆様からご質問やご意見もいただこうと思っております。

では、まずは菅原先生からお話をいただきます。

発表——菅原ますみ

菅原 現代の日本の子どもたちは、赤ちゃんの頃から極めて深くメディアに関わっています。また、大変長い時間メディアに接触している子どもたちもたくさんいますので、子どもたちの発達にも影響を与える可能性があるだろう、ということで発達研究としても取り上げる必要があると考えております。

2002年度から、NHK放送文化研究所と私たち大学の研究者の共同で、乳児期からのメディア接触がどのような影響を及ぼすのかということを、子どもたちが思春期になるまで追いかける中で検証しようという「子どもに良い放送プロジェクト」が始まりました。現時点では、スタートラインの0歳時のデータしか解析できていないのですが、今の乳児がどのように視聴しているかという実態と、ごく少数ではありますが、発育発達変数との関係について分析した結果をご報告させていただきたいと思います。

メディア視聴が乳幼児の発達にどんな影響を与えるのだろうかといったことをテーマにした科学的研究は、まだ始まったばかりでございます。攻撃的な映像、暴力的な映像、あるいは性的な描写の映像が、児童期や思春期、青年期の子どもたちにどう影響するかという研究は比較的たくさんあって、いくつかの影響性については明らかにされてきておりますが、小さい子どもたちの発達にメディアがどう影響するのかという研究はまだ少ないので現状です。

それでもいくつか幼少時のメディア接触の影響に関する結果が出ておりまして、その一つをご紹介しますと、アメリカに「セサミストリート」という特に貧困層を対象にした幼児向け教育番組がございますが、この番組の視聴が、就学前あるいは就学後の認知能力を伸ばすといった結

◆土谷みち子（つちや・みちこ）

東横学園女子短期大学保育学科助教授。日本女子大学大学院文学研究科教育学専攻修了。東京都公立幼稚園教諭、専門学校講師、日立教育振興財団日立家庭教育研究所研究員・主幹研究員を経て、現職。臨床発達心理士。専門は保育学、発達心理学（臨床保育学）。共編に『21世紀の親子支援——保育者へのメッセージ』（ブレーン出版）、共著に『子どもの発達と父親の役割』（ミネルヴァ書房）など。論文に「乳幼児初期からのビデオ視聴が子どもの成長に与える影響」など。

◆榎原洋一（さかきはら・よういち）

1951年、東京生まれ。東京大学小児科講師（現在は、お茶の水大学子ども発達教育研究センター教授）。東京大学医学部卒。専門は小児神経学、発達神経学。特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞。2男1女の父。著書に『オムツをしたサル』（講談社）、『集中できない子どもたち』（小学館）、『多動性障害児』（講談社+α新書）、『アスペルガー症候群と学習障害』（講談社+α新書）、『ADHDの医学』（学研）、『はじめての育児百科』（小学館）、『Dr. サカキハラのADHDの医学』（学研）、『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』（講談社+α新書）など。日本子ども学会運営委員。

* 因果関係の推定に必要な研究デザイン

➢ 交差時差遅れ分析:

⇒ 例えば……

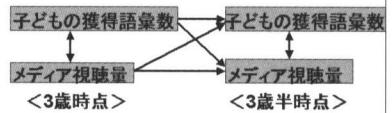


図1 交差時差遅れ分析

果が出ております。ライトさんたちの研究——アーリー・ウインドウプロジェクトという名前がついております——は、良質の子ども向け情報番組は、子どもの認知発達、特に就学前準備のようなところには良い影響を与えるが、大人向けのテレビ番組を長く見ているとかえって損なわれる可能性もあるということがわかりました。子どもの発達への影響ということでは、コンテンツやメッセージが問題であって、子どもにふさわしい質の高いものなら、特に貧困層のような社会的に厳しい状況におかれた人には良い効果を与えるかもしれないということをこの研究ではディスカッションしています。

一方で、ネガティブな影響についても研究がありまして、注意力の発達にネガティブな影響があるかもしれないということが報告されています。クリスタキスさんたちの研究では、1歳とか3歳といった幼児の段階でのメディア接触は、子どもが7歳ぐらいの児童期になったところでの注意の集中力にネガティブな影響を与えるのではないかという結果を出しております。

そのほか、わが国でも、乳幼児期に重要な感覚的、運動的体験がテレビやビデオに長時間接することによって圧迫され、感覚・運動的な発達に影響が出たり、対人コミュニケーションを減退させる可能性ということが心配されてきております。

このように、メディア視聴の影響性は両面があるわけですが、ポジティブにしろネガティブにしろ、因果関係を推定することが可能な研究が、今求められていると考えられます。子どもたちを発達に沿って追跡していくスタイルの研究では因果関係を推定する解析が可能ですが、そこでも、因果関係を推定しうるような仕掛けを研究デザインの中に設定しておかないと、推論がうまくできません。



菅原ますみ氏

最も一般的な方法は“交差時差遅れ分析”と呼ばれるものですが【図1参照】、たとえば3歳時の獲得語彙数とメディア視聴量の関係性を測定し、半年後の3歳半時にも両方を測定いたします。一般的に、子どもの獲得語彙数は0歳代後半には非常に個人差が大きく、早くたくさんしゃべれるようになる子もいれば、ゆっくりと話し始める子もいたり、あまりしゃべれなかったのに急にしゃべるようになったとか、個人差自体が安定しない傾向があります。しかし1歳半～2歳頃になってきますと、語彙数増加の個人差はある程度安定してきます。そこでたとえば3歳頃になったところで、半年間の間をおいて同じ変数、獲得語彙数とメディア視聴量を2つずつそれぞれの時期で測定して検討していくと、言葉をたくさん獲得する子はテレビをあまり見ないのか、それともメディア接触量の多さが子どもの獲得語彙数に影響を与える原因となっているのか、原因と結果がどうなっているかを統計学的にある程度すっきりと分析することができるようになります。

さて、これまでの先行研究では、それぞれに多少の不足がございます。一つは、研究を開始する時期が遅いことがあげられます。やはり研究を乳児期からスタートすることが必要かと思います。また、赤ちゃんがどのようにテレビに接しているのかという視聴の実態とともに、今申しましたような因果関係の推定をするためには、交差時差遅れ分析が可能になるような研究デザインが必要ですし、代表性の高い社会調査的な方法論と生態学的な細やかな変数設定の両者が必要であろうと考えます。そして、どういうメカニズムで影響を与えるのだろうかという仮説モデルが重要になると思います。非常にたくさんの環境要因が関係しますので、いろんな変数を測定していく研究の中で、「これが関係あるらしい」、「コミュニケーション不足が関係するかもしれない」といったリスク因子を発見するスタイルの研究がまだまだたくさん必要だらうと思います。

その上で、たとえばテレビを見て受動的に言葉を真似してしまうことが問題なのか、それともテレビを見過ぎると生活時間が圧迫されて人と会話する機会が奪われることが問題なのかななどといった、影響性に関する仮説を設定した上で検証研究が必要だらうと思います。さらに、短期的な効果だけでなく、長期的な効果や累積的な効果を確かめるための十分な調査期間の設定も求められると思われます。

次に、多動性などの本当に心配すべきような影響が出ているのかどうか、その危険ラインはどこにあるのかということです。メディアがどういうふうに子どもの発達に影響するかということを相関分析のスタイルで検討していくま

メディア接触行動に影響する遺伝と環境										
> 菅原ら(2004)の双生児研究の結果から										
		TV相関		TV時間		ゲーム相関ゲーム嗜好				
MZ	DZ	A	C	E	MZ	DZ	A	C	E	
小学生	.74	.45	77%	-	23%	.79	.47	79%	-	21%
(325組)										
中学生	.73	.75	75%	-	25%	.76	.17	75%	-	25%
(226組)										
高校生	.57	.49	55%	-	45%	.57	.49	61%	-	39%
(208組)										

MZ:一卵性 DZ:二卵性 A:遺伝 C:共有環境 E:非共有環境

表1 双生児の相関

すと、ある程度の相関係数が得られはしますが、果たしてそれが正常範囲内の個人差なのか、あるいは臨床的介入が必要な大きな発達の歪みや異常なのかという違いを見極めていく必要があると思います。子どもたちの心身の健康に対する影響性を問題にするのであれば、臨床的な診断を実施したり、先行研究に準拠した「この先は心配しなくてはいけない」というカットオフラインのようなものも、研究の中できちんと設定して見ていく必要があると思います。

それから、子ども側の要因というものの検討も非常に重要なと思われます。一つは、子どもはどうやってメディアを認識しているのか。発達するに伴って、どういうふうにメディアやその内容を理解し把握しているかということです。最近、マルメとフェルナンドの興味深い研究が発表されていますが、生後1歳のお子さんは、テレビの中で演じられる実験者の情緒的な反応を理解可能だというのです。具体的には、あるおもちゃを実験者がとても楽しいものとして見せた場合と、いやなものとして見せた場合、見た後で子どもがそのおもちゃに触れる割合が変わるので。楽しいものとして呈示された条件のときには子どもも喜んで手を伸ばしますし、いやなもの時は警戒して手を出しにくくなります。どのように子どもがテレビの情報や刺激を

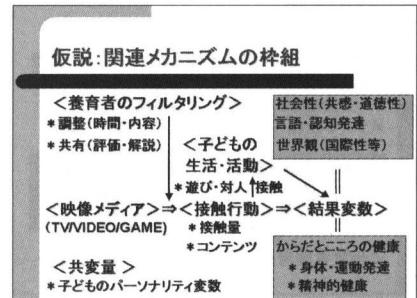


図2 仮説モデル

受けているかということを明らかにしていくためには、こうした基礎研究がもっと多く必要かと思います。

それともう一点、視聴行動には子どもの生物学的な要因も無縁ではないようです。私たちが行っている双生児研究の対象者に「どのくらいテレビを見ていますか」、「どのくらいテレビを見るのが好きですか」ということをアンケートでお伺いしてみました。すると、遺伝率というのがかなり高い割合で出てまいりました。テレビはみんな好きだし、ある程度は見ているわけですが、見る時間や嗜好度には個人差がかなりあり、それを説明する一つの要因として遺伝的な要因も関わっているようなのです。

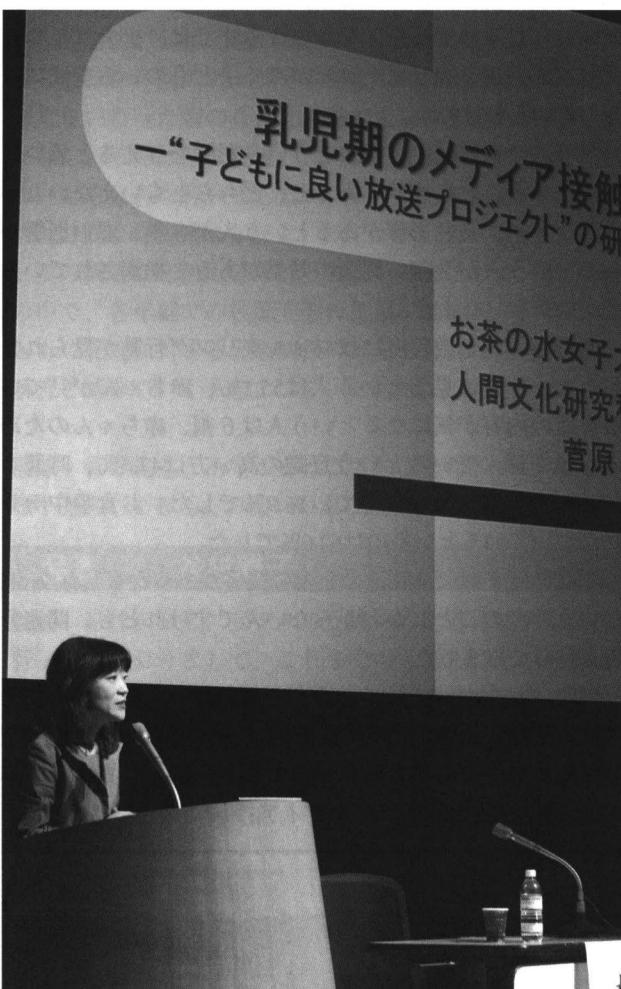
小学生325組の双生児のサンプルのうち、一卵性の双子がテレビを見る時間の相関は「.74」、二卵性の双子は「.45」と一卵性よりもはつきがありました【表1参照】。これが中学生になると両方とも比較的高く相関が出て、高校生になりますと両方とも下がってきます。

これを解析してみると、興味深いことに、年齢とともにだんだんと環境要因の影響が大きくなっていることがわかりました。ゲーム好き度についても、高校生になると若干ですが、環境要因が多くなってきています。いずれにしましても遺伝率というのが見られまして、そうしたことの個人差要因と混合作用を考えていく必要があるのではないかと考えております。

「子どもに良い放送プロジェクト」はまだスタートしたばかりで、0歳、1歳の乳児期での調査を実施している段階で、もう少し大きくなってきたらパソコンや携帯なども入ってくると思いますが、今のところはテレビとビデオとゲームという3つの映像メディアを中心に扱っています。そして、実際に視聴日誌を1週間つけていただく、という形で実測させていただいています。どのくらいの時間、どういうメディアに接触したのか、どんな番組を見たのかという、時間とコンテンツの両方の測定を試みています。子どもの体と心の健康変数と、人と関わる力や言語や認知などの発達変数、それからメディアを通じてやがて獲得するようになるであろう国際性、世界観といったような変数も想定しております。【図2参照】

特に体と心の健康のところでは、心配すべきものなのかどうかということを、どういうふうにジャッジメントしていくかを工夫しているところでございます。そして、子どもの個人差要因を、いろいろなところに顔を出す共変量として置いておきあらゆる解析の中にこうした個人差要因を含めて分析していくという計画です。

もう一つ考えておりますのが、メディアとの接触時間が



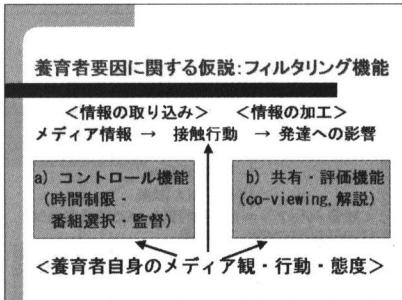


図3 養育者のフィルタリング機能

長くなると、子どもの発達に必要な他の生活や活動が影響を受けるかもしれないということで、子どもの生活活動変数を置き、これが媒介して子どもの発達に影響を与えるかもしれないという間接的な仮説をもっておりまます。さらに、養育者がどういうふうに関わるかということで、養育者のフィルタリング役割も仮説として考えております。【図3参照】

これは、情報を取り込む、情報を加工するという2つのことを考えておりまして、どういうふうに時間制限するか、どんな番組を選ぶか、見ている時にどれだけうるさく言うかといったコントロール機能と、子どもがメディアに接する時に養育者が一緒にいるのか、あるいはどういう評価や説明を与えるのかという解釈機能を設定しています。おそらくこれには養育者自身のメディア観やメディアの好き嫌い、子どもへの影響をどのように考えているかということが関わるだらうと仮説を立てております。

結果の一部を紹介させていただきたいと思いますが、平成15年の1月14日から20日にかけて、第1回目の0歳の調査を実施いたしました。計画では、毎年1月の1週間に見た番組の視聴日誌をつけていただきて、1歳ごとに発達する様子や様々な影響を調査させていただくことで、アンケートが中心となります。なお、被験者の方は、川崎市で生まれた乳児6000名から無作為抽出した1600名のうち、1224名の有効回答を0歳の段階でいただいております。【表2参照】

対象となりました乳児は、5カ月から11カ月、平均7カ月半ぐらいで、視聴開始年齢はテレビは平均3カ月でしたが、退院してきた日からという方もいらっしゃいました。ビデオもやはり3.82カ月と、早い段階で視聴が開始されていることがわかりました。

病院から帰ってきたその月から視聴していたのは、テレビでは15%、ビデオでは9.8%でした。調査時にまだテレビを見せていないという答えはテレビではわずか2.7%ですので、大部分は既に接触しているということがわかりました。一方、ビデオを見せていない過程は41.1%で、ビデオ未体験者は4割いたということになります。

接触量ですが、乳児が起きている居室でオンになっているのは、テレビが1日3時間23分、ビデオは34分でした。ベネッセ教育研究所の1歳半から6歳までの視聴時間と似たような数値になりましたが、NHKの幼児視聴率調査の2歳時では2時間34分でしたから、もしかしたら0歳の方がたくさんメディアに接しているのかもしれません。

また、何を視聴しているかということですが、トップは

子どもに良い放送プロジェクト第1回調査

期間：平成15年1月14日～20日
方法：郵送(保護者1・2用アンケート、視聴日誌)
対象：平成14年2～7月に神奈川県川崎市で生まれた乳児6000名から層化無作為抽出した1600名のうち、保護者が応諾した者。有効回答数1,224名(89%)。
内容：1週間のメディア接触実態調査(視聴日誌)、質問紙→家族のメディア接触行動、生活環境、家族関係、養育者の精神的健康、子どもの行動特徴、発達変数など

表2 子どもに良い放送プロジェクト概要

幼児向け番組で、多くはNHK教育テレビの幼児向け番組です。2位がアニメマンガ、ニュースが第3位に入っておりました。画面に人が出てきて、こちらに話しかけてくれるようなスタイルの番組が好みなのかもしれません。

赤ちゃんがどのように視聴しているかについては、すでに画面に関心を持ち始めているという答が75%、夢中になつて見ることがあるというのが5割、真似することもあるというのが3割程度報告されています。また、73%は親子で視聴されています。やはり、お母様と一緒に赤ちゃんも見ているという形が多いようです。

テレビがついてる時間は長いんですけども、赤ちゃんがじっと注目して——専念視聴と呼んでいますが——見てる割合はわずか6%で、1日平均12分ぐらいです。ですから、あとはただついているだけということになるかと思います。この実態から、一人だけで接することはそう多くないだらうという結果を得ております。

親のフィルタリング行動についても、ご覧いただきたいと思います。お母様のテレビ視聴時間は平均3時間で、小さい頃からテレビが好きと答えた方が7割を超えています。テレビがないと寂しいという人も7割近く、子どもの頃からよく見ていたという人が6割。帰宅したらまずつけるという人が4割。つけっぱなしにしているという人も3割以上いらっしゃいました。そういう意味では、ナチュラルな姿として、親を通してテレビが深く子どものいる空間に浸透しているわけです。

では、テレビは子どもにどういう影響を与えると思いますかということを聞いてみると、どちらともいえないという人が4割、良い影響があるという人が3割、悪い影響があるという人が2割。両面の効果があると推測されている方が主かもしれません。

お母さんの半数程度にはフィルタリング行動が見られましたが、一緒に見るという人は55.1%、赤ちゃんが見ている番組の内容が気になるという人は6割、赤ちゃんのために番組を選んでいるという意識の高い方は47.6%、時間を制限している人は少なくて、16.9%でした。お食事中テレビがついているというのは62.6%でした。

今回の調査では「乳児の発達に関係があるかもしれない」という程度のことしかわからないんですけども、関連分析を行ってみました。

仮説にしたがいまして、性別や月齢のような子ども自身の関連変数、家庭内の変数、それから子どもの生活活動変数として外遊び時間と絵本読みの頻度を解析に投入してみました。そして最後に、メディア接触変数ということで、

テレビの接触時間とビデオの接触時間を投入いたしました。今回取り上げましたのは、いつから発声や微笑などの行動が見られるかという初発時期だけなんですけれども、その中の2つをご紹介します。

まず、対人的な発声です。人の目を見て声を出す初発時期の分析を実施いたしましたけれども、全部合わせても3%ぐらいしか説明できなくて、用意した関係変数は大きくは変わらないようです。一つだけ有意なものとして出てきたのが絵本読みの頻度で、高い方が対的な発声の時期が早いということが出てきたのみで、メディアに関しての関連性は有意にはなりませんでした。

それから、あやされると笑う初発時期ですが、多くの赤ちゃんは生後2カ月ぐらいでにこにこ笑うようになるんですが、その時期が遅れるかどうかということで検討してみましたけれど、環境要因は全体に低くて1%程度でございます。メディアの影響は残りませんで、お母さんの子どもに対する愛着感のようなものは残ってきました。それから、お母さん自身が注意の集中性があるとか、いくつか要因として残ってきました。

もう一つ分析しましたのが、衝動の激しさと制御の弱さです。比較的小さい時から連続する傾向が言われているもので、分析では39%になりましたが、ここでもメディアとの関連性が有意なものは認められませんでした。

そのほか今回のアンケート調査では、出生時から生後半年ぐらいたった頃の身長、体重の増加率や、人見知り、手かざし、手伸ばし、寝返り、ハイハイといった行動特徴についても分析を行いましたが、いずれもテレビ、ビデオの接触時間との関係は有意なものにはなりませんでした。

この調査は今後も毎年行ってまいりますので、経年調査の中で、各年齢での視聴実態の把握、関連因子、そして子どもの発達に対する因果関係の推定を可能にできるような解析を試みていく予定でございます。以上です。

榎原 菅原先生、ありがとうございました。それでは谷村雅子先生、よろしくお願ひいたします。

発表——谷村雅子

谷村 私はテレビ、ビデオの幼児への影響に関する調査を行ってきておりまして、これまでのところ、その影響は年齢、家庭や社会の認識、内容によって異なると考えております。今日は、調査結果を紹介させていただいて、ご一緒に考えたいと思っております。

幼児については93年に、3歳から6歳の幼稚園児 300名

について、テレビの具体的影響を調査いたしました。テレビで見たことをきっかけとして、よい影響や好ましくない影響があった番組名と具体的な影響を報告していただきました。

その結果、6割の親が実例を記載してくださいました。テレビで見た話と同じ絵本に興味を持った、動物に興味を持って動物園に行きたがるようになった、工作の番組を見て、自分で空き箱を使って工夫して作るようになった、お料理番組を見てお手伝いするようになった、水泳に興味をもって習い始めたなど、関心や活動のきっかけになったというもの。それから、家族と一緒に行った場所がテレビに映り、思い出話をしたというようなコミュニケーションのきっかけになったというもの。あるいは動物の親子の様子を見て、動物にやさしく接するようになったというふうに、情緒的にもよい影響を及ぼしていることが報告されました。

これらを見ますと、よい影響をもたらすには、周囲の者が子どもの興味に応じてテレビで興味を示した絵本を買うとか、動物園に実際に連れていくとか、工作ができるように空き箱を渡すとか、子どもの話をていねいに聞いてあげるとかといった直接体験の機会を持つことが大切であることがわかると思います。そのような配慮がなければ、テレビは受動的で間接的な体験で終わってしまいます。

一方で、好ましくない影響についても、6割の方が実例を記載してくださいました。テレビから知識を得る一方で、偏った概念を持つようになった、好ましくない言葉や態度、



谷村雅子氏

テレビ・ビデオの3~6歳児への影響調査より
・親は、子どもが見る番組名も内容も大体把握
・幼児は短期的には、良い影響も好ましくない影響も
・良い影響：関心・活動の契機、教養、情操、コミュニケーション契機
→ 内容、周囲の意識が重要
・好ましくない影響：長時間、ながら視聴 年齢不相応な関心、誤った偏った概念、 好ましくない言動、暴力・下品な行動の真似 仲間はずれ、キャラクタ商品を欲しがる
→ 内容、しつけ、周囲の意識が重要だが難
→ 長期的影響は、家庭・社会の養育力による 子どもの反応を感知し、適切に対応(促進と防衛)

図1

危険、暴力、下品な行動が出た、見ないと仲間はずれになつたといった記載があったほか、テレビ視聴が長時間で、ほかの生活時間に食い込んでしまうということも多く記載されていました。

テレビのよい影響を促進したり、好ましくない影響から遠ざけたり、肅正するには、親が子どもの様子や番組を把握している必要がありますが、調査では親子一緒に見る番組がないという家庭が18%もありまして、また、子どもが見る番組名は知っていても、番組を見たことがないという家庭が27%もありました。

それから、子どもが見たがっても見せないことができる家庭が68%、見せたくないけれど子どもが見ている番組があるという家庭が63%もあって、子どもが3~6歳でも、親が番組を制限することが結構難しいという現実が指摘されました。

以上のように、幼児はテレビから、短期的にはよい影響も好ましくない影響も受けますが、これが長期的にも残るか否かとなると、家庭や社会が子どもの反応を感知して促進あるいは防御したり、軌道修正をしたりするなど、適切に対応する養育力があるかどうかによると思います。【図1参照】

次に、実際にどのような情報が放映されているのかということを把握するために、99年に、地上波7チャンネルで1週間に放映された全番組とコマーシャルを録画して調べました。

ご覧のデータは、17~22時に放映された暴力場面を示していますけれども、アニメやサスペンスドラマなどのフィクションだけでなく、バラエティや報道番組にも暴力場面が頻繁に出現していて、全チャンネル合わせて1時間平均10.2回出現していました。ですからテレビを見ていると、かなりの頻度で暴力場面に遭遇することになると思います。

同じ時期に、全国母親クラブのメディアチェック事業で、多くの保護者から子どもに有害な番組名と理由が報告されました。けれども、その他にも気になる点がありました。天気予報の番組に他の番組のコマーシャルとして暴力場面の映像と一緒に流れるなど、番組や映画のコマーシャルとして、暴力場面のみが繰り返し流れることです。このように前後関係さえわからない暴力場面も少なくないということがわかりましたが、このことは一般にはあまり指摘されていません。個々の番組だけではなく、全体でどのような情報に接するのかという受け手側の視点で、子どもを望ましくない情報から守る監視システムをつくる必要があるんじゃない

かと思います。

次に、赤ちゃんのテレビ視聴について紹介させていただきます。87年に農村と首都の3~24カ月児、1616名を対象に実態調査を行いました。その結果、テレビへの反応行動は、3~4カ月の音と光への単純な反応から発達とともに変化していくまして、最初は登場人物に声をかけたりまねをしたりしているんですけども、1歳半では親とともにテレビを楽しむようになることがわかりました。

また、テレビがついている時の0歳児と親の行動をビデオ記録して秒単位で解析した結果、音やテーマソングで見始めていること、つまらない時は他の遊びをしていること、平均注視時間は1回について9.0秒と非常に短いこと、そしていろいろな反応行動をとることが観察されました。

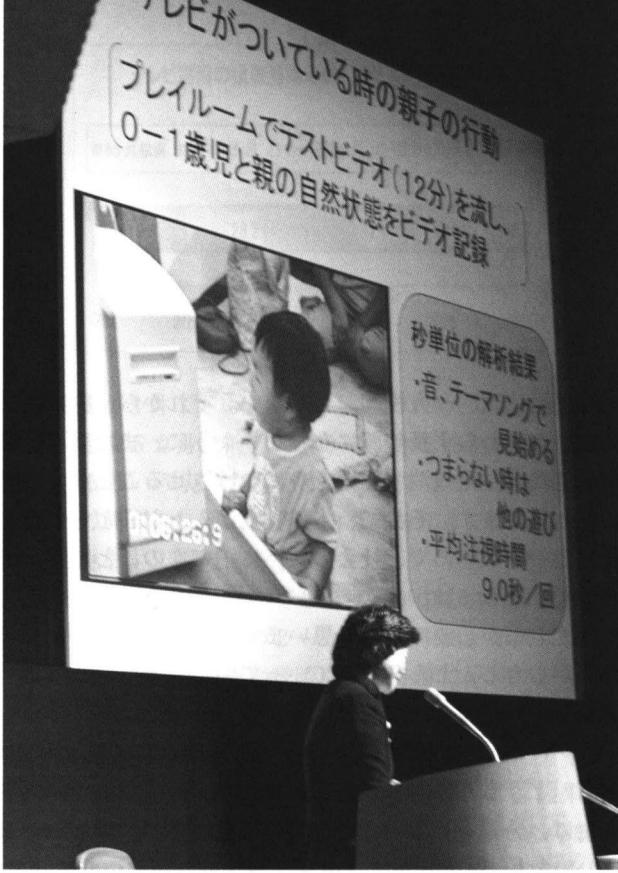
子どもの反応は、好きなキャラクターの登場を喜んでは親の顔を見て、体操や歌のまねをしては親の顔を見て、知っているものの登場を指さしたりしては親の顔を見ていました。そして、親はそれに応えていました。つまり、親子が一緒に見ていれば、テレビはコミュニケーションのきっかけになることが観察されました。

また、見る場面、見ない場面、まねや声を出す場面がどの子どもにも共通していることから、子どもの同調行動や共感反応を誘発しやすい映像や音声があることも示唆されました。そこで0歳児、1歳児が好きなコマーシャル40本と、その前後に放映されたコマーシャル40本を比較した結果、好きなコマーシャルには、赤ちゃんや子ども、人形など、自分の仲間が正面から笑顔で語りかける明るく楽しい場面で、リズミカルな音楽が流れているものを好むということが示唆されました。

以上、ご紹介した調査では、赤ちゃんがテレビに興味を持つということは自然であるし、親も上手に対応しているなというふうに思つたんです。しかし、最近、小児科医や発達の専門家から乳幼児早期のテレビ、ビデオの長時間視聴が、発達に悪い影響を及ぼす可能性が指摘されております。そこで、2003年に首都と中核市と農村地区の1歳6カ月検診対象児について、15年前とほぼ同一の調査を行いました。一つの地域が前回と同一の地域でして、1歳5カ月~7カ月児、1900人について解析いたしました。

その結果、15年前と比較して、核家族化が進行していること、テレビに親しんで育った親が増加してテレビが生活に浸透していること、逆に絵本の読み聞かせや家事をしながら子どもに話しかける家庭が減少していることがわかりました。

また、つけっぱなしの家庭とあまり見ない家庭の両方が増



えておりまして、見せ方にも多様化傾向が見られ、親が子どもと一緒にテレビを見ながら、歌ったり話しかける家庭が増えている一方で、子ども一人だけで見せていている家庭も増えていました。核家族では家庭の方針が主に親二人の考え方だけで決まるため、以前よりもいろいろな家庭があるということを念頭に置いて子どもへの影響や対策を考える必要があるのでないかと思います。

子どもの視聴時間の分布を比べますと、平均視聴時間は2.5時間と変わりませんが、87年では1時間台が最も多かったのが、03年には2時間台が増えていました、全体的には長時間化しています。一方で、1時間未満の家庭も87年と比べて増えています。

子どもの視聴時間と発達との関係では、有意語出現との関連性が示唆されました。有意語を2語以上話さない率が、視聴時間が4時間以上のグループで高率になっておりました。また、子どもの近くのテレビが8時間以上ついている家庭の長時間視聴児は、有意語出現の遅れの危険度が2.1倍と高率になっていました。子どもに見せる時間だけでなく、テレビをつけっぱなしにしないように気をつける必要があると思います。【図2参照】

次に、視聴時の親子の関わりと子どもの反応行動との関係を調べました。テレビを見ながら親が一緒に歌ったり、内容について話す家庭の子どもは、そうでない家庭の子どもに比べて視聴時に声を出したり、笑って親の顔を見たり、登場人物のまねをするなど活発でした。日常もテレビの歌を歌うと喜んだり、テレビで見た話の絵本で喜ぶなど、記憶に残る言葉の率が高いことも示されました。視聴時に親が話しかけたり、子どもの働きかけに応えたりしていると、子どもの反応は積極的で、記憶も残り、日常も親子で楽しめる。けれども、一人視聴では受動的で、日常もテレビの

テレビ視聴の乳幼児の発達への影響

臨床経験より疑問

言語遅れに長時間視聴が関係か？

集団調査及び行動観察で検討

- ・一人視聴は受動的で種々の発達に影響
- ・共同視聴は共感など情緒的コミュニケーションを促すが視聴時は発話が抑制される。
- ・言語発達に重要な2歳以下は長時間視聴は
 良くない
- ・つけっ放しは子どもにも親子関係にも好ましくない

図2

話題を共有できないことを示していると思われます。

視聴時の親の声かけの有無と子どもの視聴時間の長短別に、有意語が出現していない率を見ますと、視聴時に親が関わる短時間視聴児に比べて、関わりのない長時間視聴児では2.7倍と顕著に高率でした。テレビ、ビデオの長時間の一人視聴は、有意語出現の遅れだけでなく、言語理解、生活社会性なども遅れる傾向が見られ、避けなくてはいけないと思います。

また、視聴時に親の関わりがあっても、長時間視聴ですと有意語の遅れの危険度が1.5倍に高くなっています。これまで、一般的に、親と一緒に見ればよいと言われていましたけれども、この結果は、親が一緒に見ても長時間視聴が言語発達にはあまりよくないことを示唆していると思われます。

言語発達には、日常の親子の関わりももちろん重要です。本の読み聞かせをする家庭では、長時間視聴であっても有意語出現の遅れは少ないので、絵本の読み聞かせのない長時間視聴児は、遅れの率が顕著でした。日常の会話が少ないと、言語発達へのテレビの影響が大きくなるということを示していると思われます。

現代の乳幼児家庭は、核家族ですから子どもに声かけする人が少ないですし、携帯メールやインターネットの普及で、親自身が会話をする機会も減少していますので、今後もテレビの言語発達への影響は増大化する恐れがあります。乳幼児期は言語発達に重要な時期ですので、テレビ長時間視聴の影響について、親も社会も認識して対処していく必要があると思います。

親と一緒に視聴していても、長時間視聴ではなぜ言語発達が遅れるのかという理由を調べるために、親子のテレビ視聴のビデオ記録を解析しました結果、テレビ視聴時には親の言語的関わりが乏しいということがわかりました。テレビがついていない時は「ワンワン、かわいい、かわいいして」とか、「ねんねしちゃった、どうする？」というふうに声かけが長いのですが、テレビがついていますと、「そうそう」とか、「ワンワンね」と、短くなることが観察されました。一回の話が短く、画面のものの名称のみで終わってしまって、その状態説明がないので、ものの理解にものつながらにくいようです。長時間視聴と言語発達の遅れは、関連性だけでなく、ある程度の因果関係があると考えてよいと思われます。なお、現在解析中ですけれども、言葉遅れとビデオソフトの内容も関係があるかもしれないと思っております。

まとめますと、臨床経験から、言語や社会性の遅れに長

時間視聴が関係しているのではないかとの指摘があり、集団調査と行動観察から、一人視聴は受動的で、確かにいろいろな発達に影響すること、また長時間視聴は同時視聴であってもテレビ視聴時は発話が抑制されることが示唆されましたので、言語発達に重要な2歳以下には長時間視聴はよくないと考えます。

そこで、日本小児科学会では、乳幼児の長時間視聴の制限と、視聴時の親の関わりの重要性に留意するよう提言いたしました。また、小児科医や小児の健康に携わる方には、テレビやビデオの利用法について助言することや、長時間視聴の子どもからテレビ、ビデオを遠ざける具体的方法の助言、そして子どもに語りかけ、子どもに応えることの重要性を説明していただくようお願いしております。

けれども、長時間一人視聴の問題は、テレビを見せないというだけでは本当は解決できないと思います。核家族時代の長時間一人視聴の問題の根本的解決には、適切な育児支援が必要で、社会で支えていく必要があると思います。また、子守り代わりに使えるものがテレビ、ねんこりん、ハーネスというふうに次々と開発され、販売されている社会の変化も念頭に置く必要があると思います。

幼児のテレビ視聴の影響研究は十分ではありませんが、今のところ影響は子どもの年齢、家庭、社会の認識、メディアの内容によると思われます。また、年長の幼児に対しては、内容の影響が大きいことを意識して、親が内容や子どもの反応を把握して適切に対応し、上手に活用して、かつ悪影響を防ぐように留意していただきたいと思います。



土谷みち子氏

乳幼児には、一人視聴をさせない。それから、内容や見せ方にかかわらず長時間にならないように、また小さい時から見終わったら消す習慣を身につけさせることが大切であると思います。そして、少子社会は人々が子どもと接する機会が少ないので、社会の人々に子どものことを考えていただきためには、大人一人一人が子どもを理解するように促す方策が必要であると思います。この「日本子ども学会」からもどんどん発信していっていただきたいと思っております。

榎原 どうもありがとうございました。では、土谷みち子先生に、発表をしていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

発表——土谷みち子

土谷 私は、この4月から東横学園女子短期大学に勤務しましたが、それ以前は17年6ヶ月という長い期間、いわゆる子育て支援の実践活動を行いながら子どもの発達や親子関係に関する研究をする民間の研究所に勤めておりました。1990年代の後半になりますと、子どもたちの表情の乏しさ、それからコミュニケーションをする力の低下といいますか、人に対する関心が非常に低下していることを心配いたしまして、子どもの生活調査を基本としながら、心配なお子さんたちのご家庭の面接調査を始めました。

すると、メディアが中心となっている共通の生活があることがわかってきました。たとえば「子どもにどれくらいテレビを見ているか」という調査で1~2時間に丸をつけていた保護者の方に実際に会ってお話ししますと、「実は、赤ちゃん時代から2歳半まで、毎日2時間のビデオを何度も巻き戻して4~5時間見ていた」といった話なども聞くことができました。そこで、子どもとメディアの関係について学際的な研究を行ってほしい、特に科学的なデータを出していかないと不安を煽るだけになってしまふという思いもございまして、98年に論文発表をして問題提起をしました。その後NHKでは、菅原先生という優秀な研究者にも入っていただきまして「子どもに良い放送プロジェクト」というものが発足しまして、そこに少し力を尽くしたというような経過がございます。今、やっとここまで議論ができることに、大変喜びを感じております。

私自身がこれまでやってきた研究の一部ですが、図1は180の方に2年間かけて、お一人お一人のご家庭に面接をしたものです。

180人の調査で、全くテレビやビデオを見せていないとい

テレビ画面の視聴開始年齢(177人)1999年

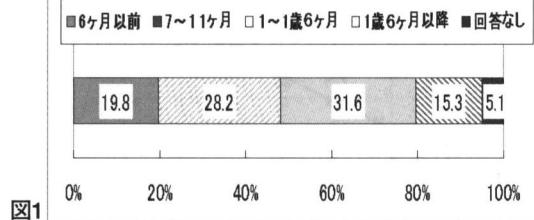


図1

うご家庭が3件ございました。残りの177人のうち20%近い方が、生後6カ月以前、お座りのできる前から視聴を開始しているという実態が明らかになってきました。これは、子どもの興味より親の目的が初めにありきではないかなと感じています。【図1参照】

またベネッセ教育研究所とNHKを中心に行った調査では、平均視聴時間分布の2~3時間を中間、それより前後ということで短時間群と長時間群の3群に分けておられるので、それにならいまして視聴開始時期を比較したところ、長時間視聴のご家庭の幼児は、乳児期初期からメディアと接触している子どもが多いことがわかりました。因果関係はわかりませんので、今後の課題です。赤ちゃんの前で、テレビをつけっぱなしにしているご家庭が多いのかもしれません。

昨年は保育園に調査して1,095名の方から回答を得ましたが、0歳児で全く見せていないという家庭が23%ありました。しかし保育時間の長い保育園でも、年齢とともにどんどん長時間視聴になる実態がわかりました。1歳児で見ない子どもも6.3%ですが5歳児になると1.8%となり、毎日3時間以上視聴する子どもは、1歳児では13%ですが5歳児では31%という結果でした。

現代社会の子どもの育つ環境の変化は著しく、少子化や教育過熱、核家族化、地域のネットワークの希薄化、そして親世代の子ども体験や生活体験の不足、また子どもが巻き込まれる事件の多発などが指摘されています。さらに子どもが青年期まで健やかに育っていくことも難しい現象も多く見られます。このような育児環境の変化による複合的な影響が幼いお子様を持っているご家庭に様々な不安をつのらせて、それぞれのご家庭の育て方にも影響していくと思われました。

特に私が注目したのは、父母に面接をすると、賢い子に育てようとか、何歳までに字が読めないといけないとか、また健診までにビデオを借りて「有意味語をいくつぐらい覚えさせることが親の課題」と語るなど、親が子どもの発達へ評価基準を持っていること、そして「親は刺激を与えなければいけない存在」といった、親が外発的に外から教育的なものを与えるといった言葉を伺ったことです。

その底辺には、「子どもと、どう遊んだらよいのかわからない」と語られるように、幼い子どもとの非言語的なかかわり（ノンバーバルコミュニケーション）に戸惑うという姿があるように思います。保健師さんが「もうちょっと言葉をかけてください」と言っても、「しゃべらない子どもに、どういう言葉をかけたらいいのかわからない」、「自

分が道化役になったような感じだ」とか、そういう語りが見られました。

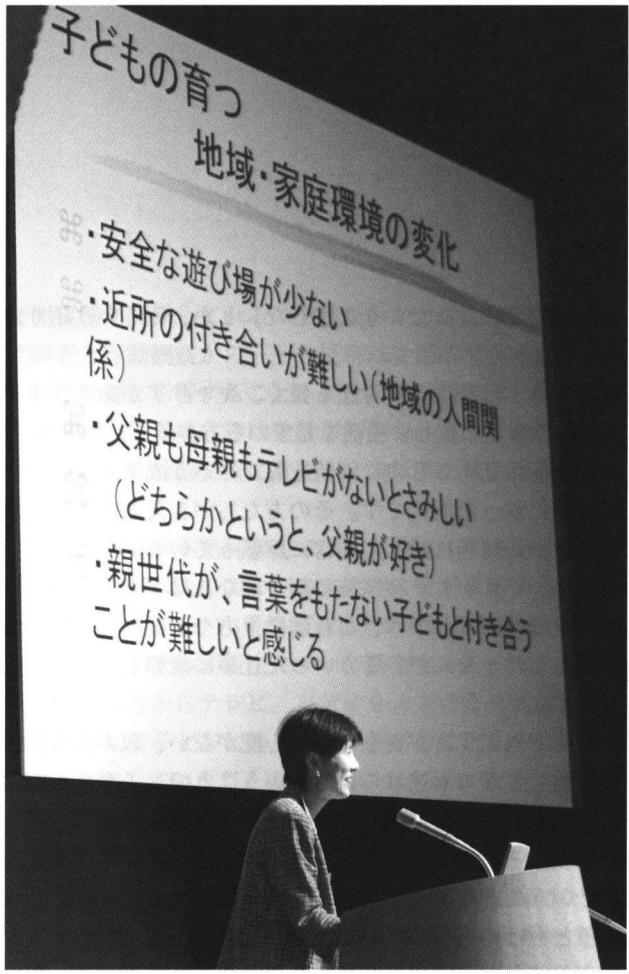
親御さん自身は、教育歴も長く、キャリアがある仕事を持つて秒単位の忙しい生活をしている方も多く、効率優先、つまり目に見えるものに価値をおくという成果主義の高度成長期に育った世代です。その方たちが、言語的な関わりができない相手に対して非常に戸惑っている実態は理解できます。それから、核家族で頼りになるはずの父親はほとんど夜中に帰るという、これは働き方や企業の問題でもあるかもしれません、そういった仕事に疲弊した語りも見られました。

室内で過ごす方が安全だし、心配がない、親の人間関係の煩わしさからも逃れられるということで、子育てが非常に室内化してくるということがメディアの過剰接触の始まりです。その中で、子どもを持てあまし、親の時間も欲しいということもあってテレビやビデオを見せ続ける。それを子どもは結構喜んでいる。それに0歳で見ていることが当たり前という時代になりましたので、みんながやっているということで、ますますはまっていくという循環が見られました。

まとめますと、乳幼児期初期からのメディアの過剰接触は、子どもの育つ地域や家庭環境の変化が、非常に大きな影響要因なのではないかということです。地域の安全性ということでは、安全神話があった学校でさえも危険な事件が起きたということで、池田小の事件以来、室内に閉じこもることが加速化したと語っているお母さんもいらっしゃいました。また地域の人間関係が非常に難しいこと、そして父親も母親もテレビがないと寂しいと思う世代であること（これは長時間視聴のご家庭では顕著でした）も要因の一つかと思います。子育てが室内化しているということの意味を、深く考える必要があると思います。

次に16家庭なのですが、お子さんが赤ちゃん時代から幼児期まで、毎日4時間以上習慣的にビデオ視聴をしていて、体を動かす外遊びは1時間前後という非常に偏った生活をしているご家庭に、「どうしてこれほどまでに見せたのか」を聞けば聞くほど、こちらが落ち込むほどに日本の非常に貧しい子育て環境が浮き彫りになってきました。

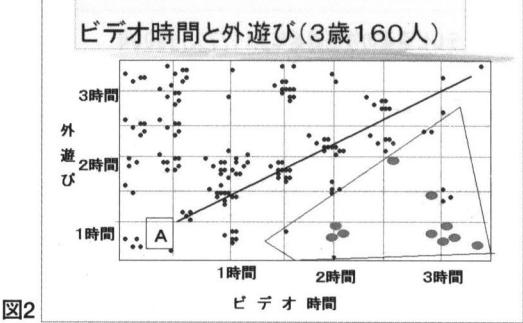
この16人うち、非常に表情が豊かで活発で、コミュニケーションもちぐはぐしていないお子さんは6人でした。そして表情が乏しく、コミュニケーションも乏しい、それ以前に他者への関心がほとんど見ることができないという心配な行動特徴が見られたお子様が10人いました【図2右下参照】。



この10人の行動特徴を、4名で観察を行いました。そうしますと、全員が合致した項目として、情緒、いわゆる対人関係、視知覚、コミュニケーションや遊びや象徴機能といった領域に心配が見られました。言葉が遅い子どもはあまり見られませんでした。そして、この10人に共通する視聴スタイルが、浮かび上がってきました。

それは、1) 乳児期の早期視聴開始。特に5カ月以前からの視聴です。生まれた時からベビーベッドごとテレビの前に寝かせて、英語をしゃべれる子にしたくて毎日英語のビデオを何時間も見せていたなど、早期ということが非常に共通していました。また2) 1回に長時間連続視聴。3) 巻き戻し（反復）視聴が日常化。ビデオを巻き戻しては1回に2~6時間も見せるという反復の視聴が日常化しているお子さんが多かったです。さらに共通しているのは、4) いつも子ども一人だけで、単独視聴していること。これは意識的に一人にしているご家庭と、お母さんが病弱であったり、下のお子さんに手がかかったり、双子を生んだり、障害を持っているお子さんがいらっしゃるということが理由のご家庭がありと、たった一人で孤軍奮闘して育児をしているお母さんの状況が見えてきました。

それから、5) 外遊びやお手伝いなど、直接体験や五感体験が少ないと非常にバランスの悪い状況で2年も3年も生活していたということがわかつてきました。また、手足の触覚や操作体験が非常に不足しているということも共通のものが出てきました。さらに昼寝とか夜寝る時の見



ながら視聴、つけるから寝なさい、つけるから起きなさいという状況で、テレビが非常に便利な子育ての道具になっている、父親が手伝ってくれない分、テレビが手伝ってくれるといった状況がご家庭の語りでございました。

この、心配な幼児の共通の視聴スタイルは、一つ一つが明確な影響要因ということではなくて、何かまとまった視聴の仕方、視聴スタイルがあるようです。一言でいうと過剰な接触ということだと思います。生後6カ月以前からビデを視聴をはじめて、1日に6時間も3年近く視聴していたという状況もあり、過剰な接触が子どもの成長に影響を及ぼす可能性があるのではないかでしょうか。

それともう一つ申し上げますと、少ない症例ではあります、共通項としては、おとなしめのお子さんが多いです。この10名のうち一人は兄弟がいますが、年子の兄弟で、ほとんど影響が見られずに、活発で表情も豊かに成長している方がいます。このご兄弟は同じビデオをつけても、母親の話では、一人はじっと集中して見ているようですが、もう一人はすぐに飽きて走り回ってしまうということで、お子さんのパーソナリティということもあるのではないか。私はそちらの影響要因はきちんと分析しておりませんので、菅原先生に委ねたいと思います。

先ほどのお話にもありました、子育て環境の研究で、テレビを見終わったら消すという習慣がある家庭のお子さんは非常に発達がよいという報告もあります。これまでいろいろなご家庭とかかるてきて、テレビ・ビデオは見たら消す習慣をご家庭でつけるということが大切なのではないかと思います。テレビ・ビデオを見せるなという極論ではなく、テレビを改めて家族の団欒に使うということも訴えていきたい。そして、乳児期には控えるということをどうしても伝えたいと思います。心と体の成長期、大人たちは子どもの豊かな育ちをささえるために、乳幼児期の体験のバランスということを考えなければと思います。

それから、親子を支える保育活動に関しては、親と子どもの関係を育むような保育を展開し、保育の中で愛着行動を促進するような遊びを導入しながら、家庭生活や日常生活の回復を図ることを考えていきたいと思います。保育で特別な行事をしている時代はほぼ終わったのではないかと感じています。子ども同士の接触をうながす共感性を育むような遊びを、乳幼児期や学童期に意識的に導入する必要性も感じます。そして、親が子どもと離れる時間が親のストレスを軽減してほっとできるとともに、一緒にいる時間も心地よいと感じる支援が、これから大切だと思います。

以前勤務していた研究所で行っていた、一般の保育に臨

床的な視点を入れていく活動の写真をいくつかお見せします。ガラス窓に絵の具で絵を描いて、その後窓を見ている子どもの顔に、反対側からホースの水をぱっとかける。子どもがハッとする表情をして、情動を刺激する遊びもしました。

また、どろんこ遊びは、今は室内で遊ぶことが多いですから皆さんきれい好きでとても難しいのですが、石鹼をお湯で溶かした泡づくり遊び、お風呂の遊びなら好きですね。こういう遊びを初めてやったという子は、1時間没頭して遊び、自分の身体感覚をつかんでいるようでした。

次は愛着行動を促すということと、子どもの五感を刺激してみようということで、お豆の遊びです。トイを斜めにして、乾燥豆を流して遊びます。下には缶のプリンカップを置いてあるのですが、いろいろな種類の豆がはじいてカチャカチャと、いろいろな音をだします。コーンと大豆、赤えんどうでは音が違うんですね。テレビがつけっぱなしだと、こういう微妙な音を感じ取るのは難しいと思います。まず親御さんが嬉しそうな顔をします。お豆で1時間も遊んだなんて生まれて初めてだというお母さん、そしてとても緊張の高いお子さんから笑顔がこぼれます。親の感情を少し刺激して、子どもと親となるべく共有空間に位置しながら、情緒的な交流を図るものです。

そして裏生地の透明な布で風をおこす遊び。また保育者

のする紙芝居やお話、人形劇などを、親のひざ、お母さんの椅子で見るというものです。家事に忙しいお母さんが、お子さんを初めて30分じっくり抱っこしたという、こういう状況が起きているわけです。

まとめいたしまして、子どもの成長は、個性と環境との複合関係から育まれると思います。また、私も16名の症例を追っておりますけれども、回復の可能性、特に社会性に関しては、非常に早期に回復できるという可能性がありました。親子で楽しく遊べる遊びを工夫しているうちに、「子どもがきらきらと輝く天使に見える」と言ったお母さんがいらっしゃいました。問題の指摘ばかりではなく、子どものかわいさを親に伝える、がんばっている親をねぎらうということが、支援者を含め、これから社会で必要なではないかと思っています。親から子どもを離すということを支援するだけではなく、親と子と一緒にいる時間の支援ということで、自然や人、モノ、自分と向き合う、それを支える何かゆったりとした時間を今後見つめられることが必要なのではないかというふうに思います。

質疑応答

榎原 どうもありがとうございました。それでは、先生方にご質問などございましたら受けさせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

(会場から) 土谷先生のご発表の16症例のお話の中で、言葉が遅い子どもはあまりなかったと言われたと思うんですが、もう少し詳しく教えていただけませんでしょうか。

土谷 16症例のうちの10名に心配な行動特徴が見られたのですが、その中には、言葉が遅れぎみの方がいらっしゃらなかったということです。またその後、2歳時点で関わった別の事例で、言語発達が遅れ気味のお子さんが2例ありましたが、臨床的な保育活動を多くしましたところ、1年後には言葉の発達が順調に回復いたしました。

(会場から) テレビ局に勤めております。谷村先生に質問なのですが、まずメディアの影響は単純に時間ではかれないと思うんです。1時間しか見ていても影響がないとは言えないというのは皆さんおっしゃっていることで、長時間がよくないという結論はどうなのでしょうか。2点目は、暴力シーンについてですが、説明写真が今ほとんどないようなものばかりが取り上



榎原洋一氏

げられていることが気になりました。また、子どもを無菌状態にしてはいけない、配慮の中にもきちんと情報をお伝えいかないといけないということもあるのではないかという点です。3点目は、テレビ以外のメディアの、たとえば携帯メールなどについてはどうお考えでしょうか。

谷村 まず、本日はシンポジウムの課題に沿って「幼児」についてお話をしました。そして、毎日4時間以上見せている幼児にいろいろな問題が出ておりますので、長時間視聴は避けましょうという意味でお話をしました。また、暴力シーンに関しましては、個々の番組については局側でいろいろ配慮なさっていると思いますけれども、たとえば天気予報の中にサスペンスドラマなどの暴力場面だけが流れるといったことが現在もございますので危惧しております。それから3番目の問題ですが、親がメールやインターネットに時間をかけていたために、子どもとの時間が少なくなっている環境の中で、さらにテレビを長時間見ることによって、余計に子どもと接する時間が少なくなっているというのが現代の家庭の状況であると思います。

(会場から) テレビ・ビデオ視聴の子どもへの影響についてですが、視聴時間というのは、もちろんあるかもしれないけれども、それが原因ではなくて、むしろ結果なのではないかなという気がします。育児が室内化しているというような話もありましたけれども、育児がうまくいかない親子という家庭で、その結果として長時間視聴になってしまふということがあるのではないかという気がしてます。

谷村 言語的関わりが少なくて言語発達が遅い。そこへもってきてテレビを長時間見せていると、言葉を使わないで、さらに遅れがひどくなる。また、テレビを見せておけばおとなしいから見せている、それで長時間視聴になっているという家庭があることは事実だと思います。でも、3歳ぐらいまでの間でしたら、テレビをやめて親子の時間を長くすることで、かなり改善している例が実際に多く観察されています。

土谷 うまくいっているご家庭が、何を基準としてうまくいっていると言っているかというと、親にストレスがない、それと、子どもが順調に発達しているということが考えられます。でもその状況を思い込んでいる場合は、順調な発

達の姿として、テレビを見て悲しい場面でさめざめ泣くなど情感豊かな心のやさしい子になっている（でも、転んでは泣かない）、それから、非常に集中してテレビを見ている（でも表情は乏しい子どもである）という報告を聞きます。テレビが原因なのかどうかはよくわかりませんけれども、私はうまくいっているかどうかということでの議論ではないと思っています。

菅原 原因か結果かというのは、非常に難しい問題だと思うのですが、それを明らかにしうる一つの可能性として、研究的には縦断的に追跡をすることがあると思います。同時に、1歳半の時点で言葉が少し遅れているということが、果たして次の時点でどうなって、キャッチアップできているのかとか、本当に最終的に大きな問題につながるのかという、その時点、その時点で発達指標をとったものの重大性を吟味していく必要があると思います。メディアを私たちがどういうふうにコントロールするかというあたりは、さまざまな研究、工夫が必要だと思っています。

(会場から) 私立幼稚園の園長をしております。うちの園では、31年間、ずっと子どものIQを測ってきてます。知能検査をすると、たいてい真ん中の普通のところが放物線状になるんですけれども、3年前からその線が崩れて、劣る、やや劣るになってきたり、放物線にならずに鍋底状になったりしてきて、ちょっと恐ろしい気がしています。

その原因を私なりに考えているんですが、子どもから話を聞くと、親子でテレビゲームをするという家庭がけっこうあるので、ひょっとしたらそれじゃないかなという気がしておりますが、いかがでしょうか。

菅原 「子どもに良い放送プロジェクト」では、テレビゲームと認知発達の関係をきちんと見ていきたいと計画しております。対象者が1歳になったところなので、もうちょっと大きくなつたところで検討したいと思っております。

土谷 テレビやビデオは一方向性で受動的、テレビゲームは双方向性です。それから、バーチャル体験、現実により近いということで、影響も子どもの認知発達に好ましいという先行研究を読んだことがございます。ですが制作側の文章の中に「飽きさせないように製作している」という一節を読んだ時、大変驚きました。私は子どもが、遊んでいても飽きるということが大事だと思います。のめり込み

を助長するということに対して懸念しています。

谷村 アンケート調査で乳児健診の場に行った時、びっくりしたことは、健診を待っているお母さん方が携帯メールなさっていたことなんです。電話なら子どもを見ながらかけられますが、携帯メールは子どもの顔を見ながらはできない。その影響は多分大きいんじゃないかなと思います。

(会場から) 赤ちゃんを連れたお母さんが夜遅くスーパーで買い物していたり、新生児を連れてゲームセンター出入りしている若いお父さんやお母さんとかを見ると、将来どうなるのかなというのがすごく気になるんですけれども、先生方はどう考えいらっしゃるでしょうか。

土谷 私自身も、お子さんのご両親と会ってお話しすると、「カラオケに行きたくなったり、急にゲームをしたくなったりした時、夜中に赤ちゃんだけを置いておくのが心配なのでゲームセンターに連れていく」というお話を聞きます。しかし、なぜいけないかということが言えないことに、今もどかしさを感じているというのが現状です。

榎原 テレビ、メディアの視聴というのは、先ほども申しましたように、コンテンツの問題、それから親子のインタラクション、相互関係の時間が少なくなるということ以外に、今日はあまり大きな問題になっていないんですが、や

はり、眠いとか、生活のリズムを乱す原因にもなっているという点で懸念を示されている方もあります。いろいろな研究が進んでいると思いますので、だんだんいろいろなことがわかってくると思います。

(会場から) 谷村先生にお伺いしたいのですが、テレビを見る時間と幼児の聴覚、視覚、感覚に直接影響はあるのでしょうか。

谷村 視覚、聴覚につきましては、以前、国立小児病院の耳鼻科と眼科の先生が調査なさって、0歳、1歳は影響はないという結論だったと思います。小児病院では視力を高めるために幼児に見せているというところもございます。小学生ぐらいになると影響は出ると思います。

榎原 たくさんのご質問をありがとうございました。議論がまだ十分尽くせない感があるとは存じますが、時間も押しておりますので、本日のシンポジウムはこれでおしまいにしたいと思います。日本子ども学会といたしましては、メディアの問題というのは非常に大きな問題であると思いますので、今後もソリューション学会、あるいは、チャイルドケアデザインという形で、研究を深めたり、あるいは具体的な工夫をするということで、皆さんと共に進めたいと思っております。

本日は、どうもありがとうございました。

